

魅力ある文と文体

31期生

I テーマ設定の理由

私たちと本とは密接につながっている。よく、本の中にひきつけられて他の人の言う事なんてまったく聞こえなかったということがあると思う。それほどまでに、私たちをひきつける魅力は、どこにあるのだろうか？ 人気のある小説を調べ、その文体をさぐってみることにした。そして、できれば自分の文章の中にとりいれていけたらと思って、この研究を始めた。

II 研究方法

[1] 研究方法

- (1) まず、附中生60人ぐらいに、「好きな作家はだれか」のアンケートをとり、人気のある作家を調べた。そして、その中から上位3名を研究の対象とした。
- (2) その3人の作品を、文の表現・ふんいき・文中の記号などに注意しながら、広い範囲にわたって読み進めた。
- (3) そして、3人の文体を比べあわせた。最後に、その応用として、3人の作家が同じ文を書けばどうなるかを自分なりに書いてみることにした。

[2] 参考文献

参考文献といっても、これを読むこと自体が自由研究になっているのである。

「きまぐれロボット」「きまぐれ星のメモ」「城の中の人」「妖精配給会社」

上の4作、星新一の作品

「幽霊」「あくびノオト」「さびしい王様」「夜と霧の隅で」

上の4作、北杜夫の作品

「坊っちゃん」「草枕」の2作、夏目漱石の作品

III 研究結果

[1] 人気のある作家のアンケートについて

(1) 方法

附中生60人を対象とする。一人につき、好きな作家の名前を2人ずつあげてもらう。結局、のべ120人の作家名があがってくることになる。

(2) 結果

上位8名は、表Iのようになった。このアンケートの大きな欠点は、2年生の票にかたよっているところと、女子の票にかたよっているところだ。よって、正確なデータとはいえないが、研究の重点はここにはないので、あまり追求しない。

また、このアンケートは外国作家も対象としたが、非常にちらばり固定した票は集まらなかった。

<表I 人気のある作家>

順位	作家名	合計票	男	女
1	星 新一	14	0	14
2	北 杜夫	8	1	7
3	眉 村 卓	6	0	6
4	夏 目 漱 石	5	2	3
5	小 松 左 京	4	2	2
5	井 上 ひ さ し	4	0	4
5	新 田 次 郎	4	4	0
5	宮 沢 賢 治	4	1	3

しいていえば、アガサ=クリスティやシエイクスピアによく票がはいっていた。その他に、男子の票をふやすと、新田次郎が3位以内にはいることはまちがいないだろう。

このようなことをふまえて、次の3人を研究対象とした。

- * 星 新一…2位と大差で1位なので、当然。
- * 北 杜夫…2位なので、やはり対象とすべきだ。

- * 夏目漱石…現代作家ばかりではつまらないから。また男女均等に票をとっているのも、魅力があるからだろう。

[2] 3人の作家の特徴の発見

これは、IIの研究方法でのべた参考文献の10冊の本から得たものである。私の研究は、主に文体について調べることが目的であるから、話の内容やおもしろさには、ふれないことにする。そして、文の長さ、特色や記号の使い方、会話などについてまとめた。本を読み自分の考えだけにしたよった結果であるので、少しちがう点があるかもしれないが、そこらへんは、おおめに見てもらいたい。

<表II 3人の作家の特徴>

	星 新一	北 杜 夫	夏 目 漱 石
話のはり方	時、場所を一言のべてはいる。	不可疑問文や問いかけではじまるのが多い。	説明ぬきで事がからはいる。
文のイメージ	そぼくな文 きっぱりした文	現実ばなれしている。 神話・おとぎ話的	短く、きっぱりした文 さっぱりしていて、 リズムがある。
文全体の形式	会話部分が多い。 問いかけの文が多い。	問いかけの文が多い。 話をわざとそらしたりする。	読者と話をしている ようである。
文の工夫	文を短くするために 行動を重ねた文が多い。	擬人法の利用「何を どうした」の「何を」 を後から述べる。	擬人法の利用 行動などを重ねた文
文体による効果	その人の話し方で、地 位・くらし・性格がわ かる。表情によって心 の変化がわかる。	その人の話し方で、地 位・くらし・性格がわ かる。たとえ、比較が 多い。	その人の話し方で、地 位・くらし・性格がわ かる。行動によって心 の変化がわかる。
記号の利用	…の記号の用法	……の記号 —の記号 <>の記号 } の用法	—の記号の用法

(1) 話のはり方

これについては、三者三様である。しかし、共通していえることは、**ダラダラと、はいらずにサラッと**はいつていることだ。文章のはじめの大切さがよくわかる。

(2) 文のイメージ

文のイメージ作りは非常に難しい。自分の文章でも、文体だけでは自分のかどうかかわらないと思う。その点、3人の作家はイメージがはっきりしている。**かざりっ気のない**ことが3人に共通している。

(3) 文全体の形式

3人とも、**読者に話しかける**ような形式をとっている。これは作者と読者が一体となっていけるという効果がある。また、これによって読者は深く本の中に、はいりこむことができる。魅力のひとつだといえる。

(4) 文の工夫

擬人法が目につく。たとえば夏目漱石のものをあげてみると、「五・六足のわらじがさびしうにひさしからつるされて」とか、「線香が、のん気そうにいぶっている」とかなどは、その感じが心にはのぼつたわってくるのである。また、星新一の**行動を重ねた文**というのは「エヌ博士はむかえ、アール氏は聞いた。」のような文である。**倒置法**もよく使われている方法だ。

(5) 文体による効果

表Ⅱからわかるように、**話し方によって地位・くらし・性格がわかる**ということが共通している。これは、例をあげてみると殿様だったら「そちはものごとをはっきり言うな。」とか、王様だったら「苦しゅうない」とか、このような言い方で人の地位がわかるのである。また性格がよく表れているのは、漱石の「坊っちゃん」が、すばらしい。同様に、表情・行動によって心の変化が表現されている。

たとえば多く使われている。例えば、「植木鉢の楓みたいな小人」や、「くつ下につきをあてるのは、脳しゅうようを摘出する手術より難しい。」などである。たとえばがあると、非常にわかりやすい。

(6) 記号の利用

これは、今まで気づかなかったことだが、**記号**は文の中で大きな役割をもっているのである。それに、一つの記号でも多くの用法がある。例えば、……でも、言いながら考えている場合・話の途中で相手にさえぎられた場合・話が続く場合・回想している場合・SF的に先をほかす場合など、様々な用法があるようだ。こんな用法を、自分なりに考えて作って作文にとり入れるのも、おもしろいと思う。(一度、やってみたら?) また、<>の記号は、その言葉を強調したい時、例えば、<死>・<生>・<自然>というように使う。

このように、表Ⅱと比べながら特徴を述べてきたが、実際言ってみるとわかりにくいと思う。そこで、私の独断によって、同じ文章をこの3人がそれぞれ書けば、どうなるかというところみをしてみよう。さて、どことなくあいになるだろうか。

(3) 文のおきかえ

まず、基本文である。これは、52年度の教科書中学校国語の1年用、新美南吉作の「歌時計」の一部分である。よく、読んでください。

基本文

二月のある日、野中のさびしい道を、十二・三の少年と、皮のかばんをかかえた三十四・五の男の人とが同じ方へ歩いていった。

風が少しもない暖かい日で、もう霜がとけて道はぬれていた。

枯れ草に影を落として遊んでいるからすが、二人の姿におどろいて、土手をむこうにこえるとき、黒い背中が、きらりと日の光を反射するのであった。

「坊、ひとりどこへ行くんだ。」

男の人が少年に話しかけた。

少年はポケットにつっ込んでいた手をそのまま二・三度前後にゆすり、人なつっこいえみをうかべた。

「町だよ。」

これは、変に恥ずかしがったり、いやに人をおそれたりしない、すなおな子どもだなど、男の人は思ったようだった。

そこで、ふたりは話し始めた。

「坊、なんて名だ。」

「れんていうんだ。」

「れん？れん平か。」

「ううん。」

と少年は首を横にふった。

次に3人の作家風にかえてみる。なるべくその**作家の感じ**を考えながら、**声を出して**読んでください。

〔星新一型〕

二月のある日。

野中の道を二人の人が歩いていた。1人は十二・三の少年。もう1人は三十四・五の男だ。風もない暖かい日。もう霜がとけていた。遊んでいるからすが二人の姿にびっくりしてとんでいく。

「坊、ひとりどこへ行くんだ。」

男は話しかけ、少年は答えた。

「町だよ。」

少年は、ポケットの中の手を二・三度前後にゆすぶった。人なつっこいえみをうかべている。すなおそうな子供だな。男はそう思って感心した。

「坊、なんて名だ。」

「れんていうんだ。」

「れん？れん平か。」

少年は首を横にふって答えた。「ううん。」

〔北杜夫型〕

みなさん、こんな話をご存知ですか。少年と男の人のお話です。

……二月のある日、野中のさびしい道を、少年と皮のかばんをかかえた男の人が並んで歩いてゆきます。少年は、十二・三ぐらい、男の人は、三十四・五ぐらいでしょうか。暖かい日で、もう霜はとけ道がきらきらと輝いています。からすが、楽しそうに影を落として遊んでいます。二人の姿におどろいたのでしょうか。とびたつた黒い背が、きらりと日の光を反射します。

男の人が少年に話しかけました。

「坊、ひとりでどこへ行くんだい？」

少年はポケットにつっ込んでいた手を、そのまま二・三度前後にゆすります。そして、人なつっこいえみをうかべて言います。

「町だよ。」

こんなふうに、変に恥ずかしがったり、いやに人をおそれたりしないのは、すなおな子どもだという、しょうこでしょう。男の人はそれに満足したようです。

「坊、なんて名だ。」

「れんていうんだ。」

「れん？れん平かい。」

少年は首を横にふって

「ううん。」といます。

〔夏目漱石型〕

野中のさびしい道を、少年と男が並んで歩いている。男は三十四・五、少年は十二・三に見える。二月だつてのに、みょうに暖かい日だ。霜がとけて道がぬれている。

からすが、のん気そうに影を落として遊んでいる。二人の姿におどろいてか、土手むこうにとんでいった。その時、黒い背中が日の光を反射させる。

「坊、ひとりでどこへ行くんだ。」と、男が少年にひょっと話しかけた。少年はえみをうかべて「町だよ。」と、ポケットの手を二・三度前後にふっている。やに、人なつっこい子だ。こんな子は、すなおにちがいない。いい子だ。「坊、なんて名だ。」と、男は少し親しげにきく。「れんていうんだ。」男は、しばらく考えてわからぬから、「れん？れん平か。」ときく。少年は首を横にふって、「ううん。」と答えてくれるだけだ。

IV 結 論

- *読む人のことを考え、自分勝手にならないこと。
- *擬人法・倒置法を有効に使うこと。
- *会話や表情や行動で、人物の心をうまくえがきだすこと。
- *記号を自分なりに使うこと。

このような要素が、そなわっている文が魅力ある文といえる。

しかし、なによりも独自のイメージを大切に育てることが大事なのであり、決して、人まねであっては、いけないのである。

V 総 括

今回は、自分の未完成な頭をフル回転させ、他のものにたよらなかつた研究であった。そのため、アヤフヤで自分勝手な結果となってしまった。特に、文の置きかえが、かなりあやしい。(興味のある人、一度だけ挑戦してみたら？ おもしろいですよ！)

はじめ、なかなか結果が出ずあせったが、長年やりたかつたことだけに、充分楽しみながらできたのは、よかつた。この研究によって、私の本への親しみは増したみたいだ。自由研究は夏休みだけのものじゃない。今後の自分の文章のイメージ作りに、大いに役立てていきたいと思っている。

最後になつたが、アンケートに協力して下さった人たち、

どうも ありがとう！